

佐保山

世阿弥作

前

ワキ 藤原俊家

シテ 里女

ツレ 同行の里女

後

ワキ 前に同じ

シテ 佐保姫

地は 大和

季は 春

「立つ旅衣春とてや。く。心ものどけかるらん。

「抑是は藤原の俊家とは我事なり。さても和州春日の明神は。氏の神にて御座候ふ間。参詣申さばやと存じ。只今和州に下向つかまつり候。

「天の戸の。明け行く空の朝ぼらけ。く。霞を分けて白雲の。衣雁金こしかたを。よそに南の都路や。春日の里に着きにけり。く。

「急ぎ候ふ程に。是は早春日の社に着きて候。又あ

の佐保山に何とやらん衣のやうに見えて候。立ち越え見ばやと存じ候。

「日にみがき。風にさらせる玉衣の。晴るゝ日影もにほふなり。

「佐保山姫の雲の袖。緑もなびく景色かな。

「おもしろや名所はさまぐ多けれども。分けて誓ひも影たかき。

「天の児屋根の神代より。誓ひの末も明らけき。月

に照りそふ春日山。弘き恵みの有難さよ。殊更に
時もあひあふ春の日の。東を知るも鹿島野や。緑
も同じ若草の。山は南の都の空。曇らぬ神の時代
かな。

下歌

「こゝはとりわき佐保山の。其山姫の衣ほす。袖白
妙の露かけて。

上歌

「玉葛。来る年の緒の春毎に。く。霞の衣緯薄
き。糸の乱れも天つ日の。のどけき色に染めな

して。猶白衣のうらゝなる。空や雲間にゝほふら
ん。く。

ワキ詞

「我佐保山に登り。四方のけしきを詠むる処に。い
となまめきたる女性。妙なる衣をさらせるけしき
見えたり。そも御身は如何なる人ぞ。

シテ詞

「さん候是は此佐保山のあたりに住む女にて候。又
これなる衣は所から。よしありてさらせる衣な
り。立ちよりてよくく御覧候へ。

ワキ「実にく此衣をよりて見れば。銀色かゝやき異香
薫じ。誠に妙なる白衣の。よくく見れば縫ひめ
もなし。こはそも如何なる衣やらん。

シテ「げによく御覧じとがめて候。是は人間の織る衣に
あらず。或る歌に。裁ち縫はぬ衣きし人もなき物
を。何山姫の布さらすらんと。かやうによみしも
此衣なり。

ツレ「もとより山に住む人の。人間の交はりなき故に。

かゝる衣も世の常ならず。

シテ「然れば仙人の衣をば。

二人「裁つこともなく縫ふ事も。なき世のためしは稀に
だに。いさ白衣の羽袖の色。妙なりと御覧候へと
よ。

ワキ「実に裁ち縫はぬ衣の事。仙人の衣と聞きしなり。
さては仙境にや入りぬらん。然らば御身は仙女に
てましますか。

シテ「いや仙女まではなけれども。所は佐保の山人なれば。もし佐保姫とや申すべき。

ワキ「不思議やさては佐保姫の。霞の衣とよみたれば。此裁ち縫はぬ薄衣も。もしは霞の衣やらん。

シテ「そも裁ち縫はぬ衣なればとて。

ワキ「霞の衣かと尋ねしは。

シテ「あら謂なの御言葉や。裁ち縫はぬ。衣ほせばとて佐保姫の。く。袖も緑の糸はへて。縫ふ事はな

くとも。霞の衣ならば。裁つことはなどかなかるべき。是は裁ちもせず縫ひもせず。まして糸もて織る事も。嵐になびく羽衣の。袖も褌もにほやかに。うらゝなる日にさらすなり。うらゝなる日にやさらさん。

地クリ「夫れ天地開闢の昔より。山海草木に至るまで。万物悉く成仏して。皆靈験の神所たり。

シテサシ「とりわき四季を司どる事。まづ春を守る神といつ

ば。

地「此山姫の神徳として。草木森羅万象まで。御影の
緑満ち満てり。然れば所の名にしおふ。佐保の山
家の恵み深く。千秋万徳の春を得て。佐保山姫と
顕はれ給ふ。

クセ「たが為めの。錦なればか秋霧の。佐保の山辺を立
ち隠すらんと。ながめけるも此山の。妙なる秋の
けしきなり。かやうに治まれる四つの時。いく年々

を送りけん。花の春。紅葉の秋の夕時雨。古き
を守るためしまでも。あふぐや青によし。奈良の
代々ぞ久しき。殊更此山は。春の日影もよそなら
で。慈悲万行の神徳の。弘き誓ひの海山も。皆安
全の国とかや。

シテ「そもく蘆原の国つ神。

地「代々に普き誓ひにも。御名はことに久堅の。天の
児屋根の其かみ。此秋津洲の主として。皇孫をい

つき給ひしより。八島に治まる時つ風。四海に畳
む波の声。万歳を呼ばふ三笠山。御影もさすや川
竹の。佐保の山辺の春の色。万山ものどかなりけ
り。

ロンギ地

「実にや誓ひものどかなる。く。佐保の山姫あら
たなる。言葉をかはすうれしさよ。

シテ

「暫く待たせ給ふべし。とても山路のおついでに。
佐保の山の神祭。月の夜遊をはじめん。

地

「月の夜遊と聞くよりも。東の嶺に光さし。

シテ

「南を見れば春日野の。

地

「三笠の森に花降りて。

シテ

「こゝにたなびく。

地

「山の名の。さをなぐるまの夢の夜の。程を待たせ
給へやと。夕霞の衣手に。立ち隠れつゝ失せにけり。
立ち隠れ失せにけるとかや。（中入）

ワキ歌

「佐保山の。柞の緑片敷きて。く。こゝに仮寐の

枕より。音楽聞え花降りて。月春の夜ぞ有難き。

く。

後ジテ

「春日野の。飛火の野守出でゝ見よ。影さす月の三

笠山。薄雲かゝる藤山の。わかむらさきの名にし

おふ。木々の梢ものどかなる。春の日影のゝどけ

さよ。

地

「二月の。初申なれや春日山。

シテ

「峰とよむまで。いたゞきまつれや佐保姫の。袖も

かざしの玉かづら。

地

「かけてぞ祈る春日野の。

シテ

「若草の山。水屋の御影。

地

「みどりもめぐみも春たつ雲の。羽袖をかへすや山

かづら。

(真の序の舞)

ロング地

「神楽の鼓春を得て。く。月の夜声も澄み渡る。

心をのぶる有難や。

シテ

「こや佐保姫の小夜神楽。時の鼓の数々に。神歌の

一節。佐保の歌とや云ひてまし。

地「それは遊女のうたふなる。声も妙なり天乙女。

シテ「天の探女の古を。

地「思ひ出づるや。

シテ「久堅の。

地「月の御舟の水馴棹。山姫の袖。かへす霞の薄衣。

裁ち縫はねども白糸の。来る春なれや永き日に。

雨つちくれを動かさで。世を守る佐保姫の。めで

たき例なるべしや。めでたき例なるべし。